

# 長崎市いじめ防止基本方針

令和 8 年 4 月  
長崎市・長崎市教育委員会

## 目 次

はじめに	3
令和8年度の長崎市いじめ防止基本方針の改訂について	4
第1 いじめの防止等のための対策の基本的な方向に関する事項	
1 いじめ防止対策推進法制定の意義	5
2 市の基本方針	6
(1) 「長崎市子どもを守る条例」との関連	
(2) 基本方針の策定	
(3) 基本方針の目的	
3 いじめの定義	7
4 いじめの防止等に関する基本的な考え方	8
(1) いじめの防止	
(2) いじめの早期発見	
(3) いじめの認知	
(4) いじめへの対処	
(5) 家庭や地域との連携について	
(6) 関係機関との連携について	
第2 いじめの防止等のための対策の内容に関する事項	
1 いじめの防止等のために市が実施すべき施策	11
(1) 子どもを守る連絡協議会の設置	
(2) いじめ問題調査チームの設置	
(3) 長崎市または長崎市教育委員会が実施すべき施策	
2 いじめの防止等のために学校が実施すべき施策	15
(1) 学校いじめ防止基本方針の策定及び公開	
(2) 学校いじめ防止基本方針の内容	
(3) 「いじめ対策委員会」の設置	
3 重大事態への対処	22
(1) 学校または長崎市教育委員会による調査	
(2) 調査結果の報告を受けた市長による再調査及び措置	
(3) 重大事態発生時の流れ	
(4) 調査結果報告書の公表について	
第3 その他いじめの防止等のための対策に関する重要事項	29
改訂履歴	

発行：平成26年4月 改訂：①平成29年8月 ②令和8年4月

## はじめに

平成 25 年 6 月 28 日「いじめ防止対策推進法」が公布され、同年 9 月 28 日に施行された。

この法律は、いじめの防止等のための対策に関し、国及び地方公共団体等の責務を明らかにするとともに、いじめの防止等のための対策に関する基本的な方針の策定や、基本となる事項を定めたものである。

さらに、平成 25 年 10 月 11 日、国の「いじめの防止等のための基本的な方針」が策定された。

長崎市教育委員会では、「いじめは、絶対に許されないこと」とする一方で、「どの子どもにも、どの学校にも起こり得る」という認識のもと、軽微な事案も見逃さず、児童生徒一人ひとりのつらい思いに寄り添う対応を行ってきた。

具体的には、実態把握のための方策として、文部科学省が毎年行っている問題行動等調査に加え、毎月実施している「生徒指導調査」や毎学期実施している「いじめ実態調査」などを行い、いじめかどうか疑わしい事案や軽微な事案でも報告するよう求めている。

また、いじめ問題の早期発見・早期対応のために「長崎県いじめ対策リーフレット」や「いじめ対策ハンドブック」の校内研修等での活用を促し、学校の対応力向上を図るとともに、スクールカウンセラーや学校相談員、学校サポーターの配置や派遣、スクールソーシャルワーカーの派遣による教育相談体制の充実を図るなど、様々ないじめ防止対策に取り組んできた。

加えて、令和 5 年度に初めて本市で発生したいじめ重大事態への対応を省みて、法に則ったいじめの認知や校内いじめ防止組織による定例会の開催などを徹底しているところである。

長崎市いじめ防止基本方針は、これらの取組に加え、国や県の基本的な方針を参酌し、さらなるいじめの防止、いじめの早期発見及び対処のための対策を、総合的かつ効果的に推進するために策定したものである。

本基本方針に示したいじめの防止等の対策は、いじめを受けた児童生徒の生命、心身を保護することが特に重要であることを認識しつつ、市、学校、家庭、地域住民その他の関係者の連携の下、いじめの問題を克服することを目指して行われなければならない。

## 令和8年度の長崎市いじめ防止基本方針の改訂について

### 1 改訂の趣旨

「長崎市いじめ防止基本方針」は平成26年に制定され、平成29年に改訂されているが、その後、長らく改訂されていない。その間に、いじめの認知やいじめ重大事態に関する社会の認識が高まり、子どもたちの命や心を守るため、法や基本方針、ガイドライン等に則ったいじめ事案への対応が強く求められている。また、令和6年8月にはいじめ重大事態の調査に関するガイドラインが改訂され、これまで行われた重大事態調査の課題が多く指摘されている。

このような中、本市においても、本市や各学校のこれまでのいじめ事案対応における課題の解消をめざし、「長崎市いじめ防止基本方針」を改訂し、学校や地域、保護者に加え、広く長崎市民に本市の姿勢を示していくことを目的として改訂を行うものである。

### 2 本市・本県の現状と課題

- ・本県は1000人あたりの認知件数が令和6年度19.8件と全国61.3件に比し認知件数が少ない傾向にある。本市のいじめ認知件数は令和6年度1000人あたり18.3人(市立小中学校のみ)であり、県と同様に認知件数が少ない。
- ・令和5年度に本市で初めて発生した2件のいじめ重大事態の対応(1件は終結、1件は第三者委員会が検証中)から、調査への第三者の関与の在り方などに課題を指摘されている。
- ・「いじめは、絶対にゆるされないこと」という基本方針の姿勢は重要だが、その一方で「どの子どもにも、どの学校にも起こり得る」という認識のもとでの対応が不足していると感じられる。

### 3 基本方針の改訂(主な改訂のポイント)

- ・積極的ないじめの認知を推進し、初期段階からの組織的な対応を徹底することで重大化を防止するという姿勢がより一層伝わるよう加除修正する。
- ・いじめ重大事態の調査において、公平性中立性を高めるため第三者の関与を高める。
- ・法やガイドラインに則ったいじめ重大事態の対応が各学校や教育委員会で適切になされるよう、詳細や留意点などを加える。また、調査結果報告の公表についても記載する。

- ・いじめ重大事態への対応の進め方を再構築し、各学校にもわかりやすいフローチャートを作成する。

#### 4 めざす姿

- ・各学校において、法やガイドラインに則ったいじめの認知が行われ、組織的な対応が徹底されることで、いじめの見逃しにより心を痛める児童生徒を絶対に生まない体制が確立する。
- ・法やガイドラインに則ったいじめ重大事態の対応が各学校や教育委員会で適切になされる。

## **第1 いじめの防止等のための対策の基本的な方向に関する事項**

### 1 いじめ防止対策推進法制定の意義

いじめの問題への対応は学校における最重要課題の一つであり、一人の教職員が抱え込むのではなく、学校が一丸となって組織的に対応することが必要である。また、関係機関や地域の力も積極的に取り込むことが必要であり、これまでも、国や各地域、学校において、様々な取組が行われてきた。

しかしながら、未だ、いじめを背景として、児童生徒の生命や心身に重大な危険が生じる事案が発生している。

いじめの問題への対応力は、わが国の教育力と国民の成熟度の指標であり、子どもが接するメディアやインターネットを含め、他人の弱みを笑いものにしたり、暴力を肯定していると受け取られるような行為を許容したり、異質な他者を差別したりといった大人の振る舞いが子どもに影響を与えるという指摘もある。

いじめから一人でも多くの子どもを救うためには、子どもを取り囲む大人一人ひとりが、「いじめは絶対に許されない」、「いじめは卑怯な行為である」、「いじめはどの子どもにも、どの学校にも、起こりうる」との意識を持ち、それぞれの役割と責任を自覚しなければならず、いじめの問題は、心豊かで安全・安心な社会をいかにしてつくるかという、学校を含めた社会全体に関する国民的な課題である。

このように、社会総がかりでいじめの問題に対峙するため、基本的な理念や体制を整備することが必要であり、平成25年6月、「いじめ防止対策推進法」が成立した。

## 2 市の基本方針

### (1) 「長崎市子どもを守る条例」との関連

#### ア 条例制定の背景

- 子どもはそれぞれがかけがえのない存在であり、社会の宝であり未来の希望である。子どもは、自らを大切にし、一人の人間として心も体も大切にされなければならない。
- 長崎市民平和憲章では、「お互いの人権を尊重し、差別のない思いやりにあふれた明るい社会づくりに努めます」とうたい、長崎市は一人ひとりがお互いを認め合うとともに、全ての人が他の人を大切にし、人と人が絆で結ばれ、共に支え合い、心豊かに暮らせることを目指している。
- 子どもの心身に重大な影響を及ぼすいじめ等は、子どもの尊厳を脅かし、基本的人権を侵害するもので、絶対に許されない行為である。このようないじめ等から子どもを守り、次代を担う子どもが健やかに成長することができる環境を整えることは、社会全体で取り組むべき課題である。
- 子どものいじめ等の防止等についての基本的な考え方を明らかにし、市民一丸となって子どもが安心して生活し、学ぶことができる環境づくりを推進していくため、「長崎市子どもを守る条例」は制定された。

#### イ 基本的な考え方

- いじめ等は、子どもの心身の成長及び人格の形成に重大な影響を及ぼすことから、いかなる理由によるかを問わず、これらが行われないようにしなければならない。
- 市、保護者、市民、事業者、学校、育ち学ぶ施設、関係機関等は、子どもが安心して生活し、学ぶことができる環境を整えるため、主体的かつ相互に連携して、いじめ等の防止に取り組まなければならない。
- いじめによる重大な影響を防ぐため、法の定義に則り、いじめを初期段階で認知し、教師が一人で抱え込むことなく組織的に対応しなければならない。

### (2) 基本方針の策定

長崎市は、「長崎市いじめ防止基本方針」（以下「市の基本方針」という。）を策定する。市の基本方針には、「長崎市子どもを守る条例」の理念を共有し、国や長崎県のいじめ防止基本方針を参酌して策定することとする。また、学校は市の基本方針を参酌して「学校いじめ防止基本方針」を策定する。

(「いじめ防止対策推進法第12・13条」以下法律名は省略する。)

※市の基本方針において「学校」とは、市立学校をいう。

### (3) 基本方針の目的

市の基本方針は、いじめの問題への対策を市民一丸となって進め、いじめの防止、早期発見、いじめへの対処、地域や家庭・関係機関間の連携等をより実効的なものにするため、法により新たに規定されたいじめへの組織的な対応、重大事態への対処等に関する具体的な内容等を明らかにするとともに、これまでのいじめ対策の蓄積を生かしたいじめ防止等のための取組を定めるものである。

## 3 いじめの定義

「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。  
(第2条)

「一定の人的関係」とは、学校の内外を問わず、同じ学校・学級や部活動の児童生徒や、塾やスポーツクラブ等当該児童生徒が関わっている仲間や集団（グループ）など、当該児童生徒と何らかの人的関係を指す。

「物理的な影響」とは、身体的な影響のほか、金品をたかられたり、隠されたり、嫌なことを無理やりさせられたりすることなどを意味する。

### 【具体的ないじめの態様（例）】

- (1) 冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる
- (2) 仲間はずれ、集団による無視をされる
- (3) ぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする
- (4) 金品をたかられたり、隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする
- (5) 嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする
- (6) パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされる

これらの「いじめ」の中には、犯罪行為として取り扱われるべきと認められ、早期に警察に相談することが重要なものや、児童生徒の生命、身体又は財産に重大な被害が生じるような、直ちに警察に通報することが必要なものが含まれる。これらについては、教育的な配慮や被害者の意向を配慮し、警察に相談・通報の上、連携した対応をとることが必要である。

また、表面上けんかやふざけ合いのように見える行為であっても、見えない所で被害が発生している場合もあるため、背景にある事情の調査を行い、児童生徒の感じる被害性に着目し、いじめの定義に該当するか否かを判断するものとする。

指導の工夫として、例えば好意から行った行為が意図せずに相手側の児童生徒に心身の苦痛を感じさせてしまったような場合、軽い言葉で相手を傷つけたが、すぐに加害者が謝罪し教員の指導によらずして良好な関係を築くことができた場合等においては、学校は、「いじめ」という言葉を使わず指導するなど、柔軟な対応による対処も可能である。ただし、これらの場合であっても、法が定義するいじめに該当するため、事案を法第 22 条の学校いじめ対策組織へ情報共有することは必要となる。

## **4 いじめの防止等に関する基本的な考え方**

### (1) いじめの防止

いじめの発生は、他人の立場を理解する心や思いやりの心が欠如し、自己中心的な考えをもったり、異質なものを排除しようとしたりするなど、心の未熟さに起因することが多い。

いじめを生まない環境を整えていくために、心の時間の工夫や道徳科における互いの良さを認め合う態度を涵養する授業の実施、特別活動の中で体験活動を多く取り入れた児童生徒のよりよい人間関係づくりを行うなど、まずは豊かな心を育む取組を充実させることが何よりも大切なことである。その取組を通して児童生徒の自己肯定感や自己有用感を育てるとともに、まわりの人の喜びや心の痛みに共感し、他を思いやる心を育むといった心の醸成を図ることが必要である。また、いじめの背景にあるストレス等の要因に着目し、その改善を図り、ストレスに適切に対処できる力を育む観点も必要である。

**児童等は、いじめを行ってはならない。(第4条)**

いじめは絶対に許されない卑怯な行為であり、どのような社会にあってもいじめは、いじめる側が悪いという明快な一事を毅然とした態度で行きわたらせることが重要である。

長崎市では、これまでもいじめ問題に関しては「いじめは絶対に許されない」との認識を、学校の教育活動全体を通じて児童生徒一人ひとりに徹底することを基本姿勢とし、対応を行ってきたところである。

**保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、その保護する児童等がいじめを行うことがないよう、当該児童等に対し、規範意識を養うための指導その他の必要な指導を行うよう努めるものとする。**

**(第9条)**

保護者は、家庭の温かな人間関係の中で、児童生徒のいじめを許さない心を育てるために、思いやりの心や善悪の判断、正義感を育むための指導を行わなければならない。また、そのために日ごろから児童生徒が悩みを相談できる雰囲気づくりに努めることが大切である。

学校や保護者の取組に加え、いじめの問題への対応の重要性についての認識を市民全体に広め、家庭、地域、関係機関が一体となって取組を推進するための普及啓発が必要である。

**(2) いじめの早期発見**

いじめの早期発見のためには、児童生徒の些細な変化に気づく力を高めることや、いじめの可能性があると感じたら迷うことなく、個人面談や情報収集を行うことが必要である。

さらに、いじめの早期発見のため、学校は、定期的・必要に応じたアンケート調査や教育相談の実施、電話相談窓口の周知等により、児童生徒がいじめを訴えやすい体制を整えるとともに、家庭、地域と連携して情報を収集する等、地域ぐるみで児童生徒を見守ることが必要である。

### (3) いじめの認知

学校においては、「いじめの認知件数は『学校の本気度』の指標」(R6 長崎県いじめ対策リーフレット)として主観ではなく、法の定義の下、正確に認知していく。「いじめの芽」や「いじめの兆候」もいじめとして認知し、早期に組織的な対応を行う。

#### 【いじめとして認知されず、見逃される傾向のある事案例】

- ・ちょっとした声掛けで傷ついた等のごく初期段階のいじめ事案
- ・好意から行ったが、意図せず相手を傷つけたという事案
- ・けんか等、両方に非がある事案(いじめと認知することを要しない「けんか」は極めて限定的である)

### (4) いじめへの対処

いじめがあることが確認された場合、学校は直ちに、教職員が連携し、いじめを受けた児童生徒やいじめを知らせてきた児童生徒の安全を確保し、いじめたとされる児童生徒に対して事情を確認した上で適切に指導する等、組織的な対応を行うことが必要である。また、家庭や教育委員会への連絡・相談や、事案に応じ、関係機関との連携が必要である。このため、教職員は平素から、いじめを把握した場合の対処の在り方について、理解を深めておくことが必要であり、また、組織的な対応を可能とするような体制整備が必要である。

### (5) 家庭や地域との連携について

いじめ問題を認知したら、関係の児童生徒や家庭間での解決を図るだけでなく、事案によってはPTAや関係機関と協議することも必要である。PTAの会合で取り上げたり、関係機関との協議を設定したりする場合は、解決に向けた取組としてねらいや内容を明確にすることが大切であるとともに、個人情報やプライバシーの問題も踏まえ、慎重に対応することが重要である。

### (6) 関係機関との連携について

いじめの問題への対応において、学校や教育委員会の指導により十分な効果を上げることが困難な場合には、関係機関(警察、児童相談所、医療機関等)との適切な連携が必要であり、そのためには平素から関係機関の窓口や連絡会議の開催等、情報共有体制を構築しておくことが必要である。

## **第2 いじめの防止等のための対策の内容に関する事項**

### **1 いじめの防止等のために市が実施すべき施策**

#### (1) 子どもを守る連絡協議会の設置

長崎市は、いじめの防止等に関係する機関等の連携を図るため、「子どもを守る連絡協議会」を長崎市子どもを守る条例の中に位置づける。

#### (2) いじめ問題調査チーム（市教委を主体とする重大事態調査）

長崎市は、市の基本方針に基づきいじめ事案への対応を迅速かつ実効的に行うため、「いじめ問題調査チーム」を置く。このチームは、学校教育課長を筆頭とし、学校教育課生徒指導担当、スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカー等で構成する。

○ いじめ問題調査チームは、いじめ事案への対応を実効的に行うための機能として、次の役割を担うものとする。

- ・学校におけるいじめに関する通報や相談を受け、当事者間の関係を調整するなどして問題の解決を図る。
- ・学校におけるいじめの事案について、長崎市教育委員会が学校からいじめの報告を受け、自ら調査を行う必要がある場合に当該調査に当たる。

※P23 3 重大事態への対処 ③調査の主体参照

#### (3) 長崎市又は長崎市教育委員会が実施すべき施策

##### ア いじめの防止

- いじめの防止等のための対策が、関係者の連携の下に適切に行われるよう関係機関、学校、家庭、地域間の連携の強化、その他必要な体制の整備を行う。
- 保護者が、法に規定された保護者の責務等を踏まえて子どもの規範意識を養うための指導等を適切に行うことができるよう、ファミリープログラム等を有効活用するなどして保護者、家庭への支援を行う。
- いじめの防止等のための対策が専門的知識に基づき適切に行われるよう、生徒指導に係る体制等の充実のための教諭、養護教諭その他の教職員の配置、心理・福祉等に関する専門的知識を有する者であって、いじめの防止を含む教育相談に応じる者の確保、いじめへの対処に関し助言を行うために学校の求めに応じて派遣される者の確保等必要な措置を行う。

- 児童生徒の豊かな情操と道徳心を培い、心の通う人間関係を構築する能力の素地を養うことがいじめの防止に資することを踏まえ、「長崎っ子の心を見つめる教育週間」や「長崎子ども体験推進事業」等を活用して家庭や地域と連携した取組を推進し、全ての教育活動を通じた道徳教育及び体験活動等の充実を図る。
- 児童生徒と教職員の信頼関係を築き、児童生徒が自他を認め合う学校生活の中で、自己肯定感を高めることができるような取組を推進する。
- いじめの防止に資する活動であって児童生徒が自主的に行うものに対する支援や児童生徒及びその保護者並びに教職員に対するいじめを防止することの重要性に関する理解を深めるための啓発その他必要な措置を講ずる。
- 児童生徒及びその保護者が、発信された情報の高度の流通性、発信者の匿名性その他のインターネットを通じて送信される情報の特性を踏まえて、インターネットを通じて行われるいじめを防止し、及び効果的に対処することができるよう、これらの者に対し、必要な研修及び啓発活動を実施する。

#### イ いじめの早期発見

- いじめに関する通報及び相談を受け付けるための体制の整備を行う。
- こども相談センター（こどもみらい課）によるこども相談（電話、来所、LINE 等による相談への対応）を実施する。
- いじめの防止及び早期発見のための方策等、いじめを受けた児童生徒又はその保護者に対する支援、及びいじめを行った児童生徒に対する指導又はその保護者に対する助言の在り方、インターネットを通じて行われるいじめへの対応の在り方、その他のいじめの防止等のために必要な事項やいじめの防止等のための対策を実施する。
- 学校におけるいじめの防止等の取組の点検・充実を図る。
  - ・定期的なアンケートや、個人面談等により各学校が把握したいじめに関する情報について、定期的に報告を受けるとともに、その取組を点

検し、実態把握に努める。

- ・文部科学省作成いじめ重大事態の調査に関するガイドライン チェックリスト【チェックリスト①】「いじめ重大事態に対する平時からの備え」や県教育委員会作成の「長崎県いじめ対策リーフレット」「いじめ対策ハンドブック」、「いじめ問題への取組についてのチェックポイント」を有効活用し、学校におけるいじめの防止等の取組の充実を促す。
- より多くの大人が児童生徒の悩みや相談を受け止めることができるようにするため、PTA や地域の関係団体と組織的に連携・協働する体制を構築する。
- 学校の教職員、地方公共団体の職員等で児童生徒からの相談に応じる者及び児童生徒の保護者は、児童生徒からいじめにかかる相談を受けた場合で、いじめの事実があると思われるときは、当該児童生徒が在籍する学校へ通報等の適切な措置をとるよう啓発する。

#### ウ いじめに対する措置

- 教育相談に係る研修を充実させ、教職員の教育相談技能の向上を図る。
- スクールカウンセラーの配置・派遣、学校サポーターや学校相談員の配置による教育相談体制の充実を図る。
- 問題を抱える児童生徒の生活環境等の課題解決を図るため、スクールソーシャルワーカーを派遣する。
- 「学校・警察の相互連絡制度」を積極的に運用するとともに、警察官経験者であるスクールサポーターや、県警察少年サポートセンター等を通じて、警察との情報共有を進める等により、早期の立ち直り支援に努める。
- いじめを受けた児童生徒といじめを行った児童生徒が同じ学校に在籍していない場合であっても、学校がいじめを受けた児童生徒又はその保護者に対する支援及びいじめを行った児童生徒に対する指導又はその保護者に対する助言を適切に行うことができるようにするため、学校相互間の連携協力体制を整備する。

- 当該学校に在籍する児童生徒及びその保護者並びに当該学校の教職員がいじめに係る相談を行うことができる体制を整備する。

#### エ その他

- 教育委員会及び学校は、学校いじめ防止基本方針に基づく取組（いじめが起きにくい・いじめを許さない環境づくりに係る取組、早期発見・事業対処のマニュアルの実行、定期的・必要に応じたアンケート、個人面談・保護者面談の実施、校内研修の実施等）の実施状況を学校評価の評価項目に位置付けるよう、各学校に対して必要な指導・助言を行う。
- 教育委員会及び学校は、教員評価において、いじめの問題を取り扱うに当たっては、いじめの有無やその多寡のみを評価するのではなく、日頃からの児童生徒の理解、未然防止や早期発見、いじめが発生した際の問題を隠さず、迅速かつ適切な対応、組織的な取組等を評価するよう、実施要領の策定や評価記録書の作成、各学校における教員評価への必要な指導・助言を行う。

## 2 いじめの防止等のために学校が実施すべき施策

学校は、いじめの防止等のため、学校いじめ防止基本方針に基づき、いじめの防止等のための組織を中核として、校長の強力なリーダーシップの下、一致協力体制を確立し、長崎市教育委員会とも適切に連携の上、学校の実情に応じた対策を推進する。

### (1) 学校いじめ防止基本方針の策定及び公開

学校は、市の基本方針を参酌するとともに、長崎市子どもを守る条例の理念を共有し、どのようにいじめの防止等のための取組を行うかについての基本的な方向や、いじめの防止等のための取組の内容等を「学校いじめ防止基本方針」（以下「学校基本方針」という。）として定め、学校のホームページへの掲載その他の方法により公開し、保護者や地域住民が内容を容易に確認できるようにする。

### (2) 学校いじめ防止基本方針の内容

学校基本方針には、「いじめの防止」「いじめの早期発見」「いじめに対する措置（含むいじめ重大事態）」を主な項目として「学校がどのような子どもを育てようとしているのか」、そのために「教職員は何をするのか」、「保護者や地域はどう協力するのか」「関係機関とどう連携するのか」等を示す。具体的には、次のような取組が考えられる。

#### ア いじめの防止（第15条）

いじめを生まない生き生きとした学校づくりに向け、校内の指導体制の確立、家庭・地域社会との連携強化、いじめの問題を自分たちの問題と捉えられる子どもの自己指導能力の育成などが大切である。

##### ① 校内指導体制の確立

特定の教職員が問題を抱え込むことなく、いじめの重大性を全教職員で認識し、校長を中心に一致協力した指導体制を確立する。

##### ② 教師の指導力の向上

「長崎県いじめ対策リーフレット」や「いじめ対策ハンドブック」を活用した研修を実施する等、いじめ問題に関する指導上の留意点などについて、教職員間の共通理解を図り、その観察力や対応力の向上に努める。

③ 人権意識と生命尊重の態度の育成

人権教育の充実と、お互いを思いやり、尊重し、生命を大切にする指導等に努める。全ての教育活動を通して、自己肯定感や社会性を培う取組や共感的人間関係を育成する指導・支援を継続する。

④ 道徳性を養う道徳教育の充実

「長崎っ子の心を見つめる教育週間」等を活用し、いじめ防止や生命尊重等をねらいとした道徳の時間の指導や取組を実践する。

⑤ 子どもの自己肯定感の育成

自他を認め合い一人ひとりに居場所のある学校生活を構築していく中で、自己肯定感を育成し、「将来の夢や希望を自らの言葉で語る児童生徒」を育む教育等を推進する。

⑥ 子どもの自己指導能力の育成

児童会・生徒会活動において、平成25年度の生徒会リーダー研修で策定した「いじめゼロ宣言」等を活用し、いじめに関わる問題を取り上げるなど、児童生徒が自主的に取り組む活動を計画的に仕組み、指導・支援する。特に、中学生議会で議決した全中学校共通の取組等の実践を支援する。

⑦ 学校として特に配慮が必要な児童生徒

- ・発達障害を含む、障害のある児童生徒が関わるいじめについては、教職員が個々の児童生徒の障害の特性への理解を深めるとともに、個別の教育支援計画や個別の指導計画を活用した情報共有を行いつつ、当該児童生徒のニーズや特性、専門家の意見を踏まえた適切な指導及び必要な支援を行うことが必要である。
- ・海外から帰国した児童生徒や外国人の児童生徒、国際結婚の保護者を持つなどの外国につながる児童生徒は、言語や文化の差から、学校での学びにおいて困難を抱える場合も多いことに留意し、それらの差からいじめが行われることがないように、教職員、児童生徒、保護者等の外国人児童生徒等に対する理解を促進するとともに、学校全体で注意深く見守り、必要な支援を行う。
- ・性同一性障害や性的指向・性自認に係る児童生徒に対するいじめを防止するため、性同一性障害や性的指向・性自認については様々な考え方があることを踏まえ、特定の考え方に固執しないよう教職員への正しい理解の促進や、学校として必要な対応について周知する。
- ・地震や風水害等の自然災害に遭った児童生徒（以下「被害児童生徒」という）が受けた心身への多大な影響や慣れない環境への不安感を教職員

が十分に理解し、当該児童生徒に対する心のケアを適切に行い、細心の注意を払いながら、被災児童生徒に対する必要な指導を組織的に行う。

⑧ 家庭・地域、関係機関との連携強化

家庭やPTA、地域の関係団体とともに、いじめ問題等について協議する機会を設け、いじめの根絶に向けた地域ぐるみの対策を推進する。また、保護者向けリーフレット「大切な子どもたちをいじめから守るために」等を活用し、学校・保護者・地域等が一体となった取組を推進する。

⑨ 学校いじめ防止基本方針の周知

入学時、各年度始めには、児童生徒、保護者、関係機関等へいじめ問題に対する学校基本方針を必ず説明し、学校や保護者の責任等を明らかにするとともに、保護者、地域住民の理解を得る。また、より多くの大人が子どもの悩みや相談を受け止めることができるようにする。

⑩ 学校いじめ防止基本方針による取組の評価

各学校は、学校いじめ防止基本方針に基づく取組（いじめが起きにくい・いじめを許さない環境づくりに係る取組、早期発見・事案対応のマニュアルの実行、定期的・必要に応じたアンケート、個人面談・保護者面談の実施、校内研修の実施等）の実施状況を学校評価の評価項目に位置付け、目標の達成状況を評価する。評価結果を踏まえ、取組の改善を図る。計画的かつ継続的な点検・評価に取り組むとともに、教職員の問題意識を持続させる。

イ いじめの早期発見（第16条）

子どもに関する情報を全職員で共有することは、いじめ問題への具体的な取組の第一歩である。このため、日頃から児童生徒の見守りや信頼関係の構築等に努め、児童生徒が示す変化や危険信号を見逃さないようアンテナを高く保つ。併せて、学校は定期的・必要に応じたアンケート調査や教育相談を実施するなど、児童生徒がいじめを訴えやすい体制を整え、いじめの実態把握に取り組む。

① 教職員による観察や情報交換

児童生徒の些細な変化に気づいた場合、教職員がいつでも情報を共有できる工夫（5W1H気づきメモなど）を行う。

② 定期的・必要に応じたアンケート調査や個人面談等の実施

児童生徒の生活実態について、定期的・必要に応じたアンケート調査や個別面談、保護者面談の実施、生活ノートの活用等、きめ細かな把握に努

める。

③ 教育相談体制の整備

校内に児童生徒や保護者等の悩みを積極的に受け止めることができる教育相談体制を整備する。また、その充実に向け、スクールカウンセラーや学校サポーター、学校相談員、スクールソーシャルワーカーなど、学校内外の専門家の活用を図る。

④ 情報の収集

児童生徒の悩みや相談をより多く受け止めることができるように、PTA や地域の関係団体と組織的に連携・協働する体制を構築する。

⑤ 相談機関等の周知

学校以外の相談窓口について、周知や広報を継続して行う。

ウ いじめに対する措置（第 22～27 条）

いじめの発見・通報を受けた場合には、特定の教職員で抱え込まず、速やかに管理職への報告に加え、「いじめ対策委員会」による会議を開催するなど組織的に対応する。被害児童生徒を守り通すとともに、教育的配慮の下、毅然とした態度で加害児童生徒を指導する。これらの対応について、教職員全員の共通理解、保護者の協力、関係機関・専門機関との連携の下で取り組む。

① いじめの発見や相談を受けたときの対応

遊びや悪ふざけ等、いじめと疑われる行為を発見した場合、その場でその行為を止める。児童生徒や保護者からいじめの相談や訴えがあった場合は、真摯に傾聴する。ささいな兆候であっても、いじめの疑いがある行為には、早い段階からの確に関わりを持つことが必要である。その際、いじめられた児童生徒やいじめを知らせてきた児童生徒の安全を確保する。また、正確かつ迅速な事実関係の把握に努めるとともに、事実を隠すことなく、保護者等と協力して対応する体制を整える。

② 組織的な対応

発見・通報を受けた教職員は一人で抱え込まずに「いじめ対策委員会」へ報告し、その情報を共有する。その後は、当該組織が中心となり、速やかにその指導・支援体制を組み、対応の組織化を図る。

③ いじめられた児童生徒及びその保護者への支援

いじめられている児童生徒から、事実関係の聴取を行う。その後、心のケアや様々な弾力的措置等、いじめから守り通すための対応を行う。また、

家庭訪問等により、確実な情報を迅速に保護者へ伝え、今後の対応について保護者と情報を共有する。あわせて、いじめられた児童生徒にとって信頼できる人（親しい友人や教職員、家族、地域の人等）と連携し、いじめられた児童生徒に寄り添い支える体制をつくる。状況に応じて、臨床心理士や福祉士等の外部専門家の協力を得る。

④ いじめた児童生徒への指導又はその保護者への助言

いじめたとされる児童生徒からも事実関係の聴取を行い、いじめが確認された場合、学校は組織的にいじめをやめさせ、その再発を防止する措置をとる。いじめの状況に応じて、心理的孤立感・疎外感を与えないよう一定の教育的配慮の下、特別の指導計画による指導（出席停止も含む。）の他、警察等との連携による措置も含め毅然とした対応を行う。また、保護者へ、継続的な助言を行う。

⑤ 集団への働きかけ

はやし立てたり面白がったりする存在の「観衆」や、周辺で暗黙の了解を与えている「傍観者」の中からいじめを抑止する「仲裁者」が現れるよう、あるいは誰かに相談する勇気を持つよう指導する。互いを尊重し、認め合う人間関係を構築できるような集団づくりに努める。

⑥ いじめ解消の要件

いじめが「解消している」状態とは、少なくとも次の二つの要件が満たされている必要がある。ただし、これらの要件が満たされている場合であっても、必要に応じ、他の事情も勘案して判断するものとする。進級・進学・転学の際は、引継ぎシート等を活用し情報を確実に引き継ぐ。

（要件1）いじめに係る行為が止んでいること

被害者に対する心理的または物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）が止んでいる状態が相当の期間継続していること。この相当の期間とは、少なくとも3か月を目安とする。ただし、いじめの被害の重大性等からさらに長期の期間が必要であると判断された場合は、この目安にかかわらず、長崎市教育委員会または学校いじめ対策組織の判断により、より長期の期間を設定するものとする。学校の教職員は、相当の期間が経過するまでは、加害・被害児童生徒の様子を含め状況を注視し、期間が経過した段階で判断を行う。行為が止んでいない場合は、改めて、相当の期間を設定して状況を注視する。

(要件2) 被害児童生徒が心身の苦痛を感じていないこと

いじめに係る行為が止んでいるかどうかを判断する時点において、被害児童生徒がいじめの行為により心身の苦痛を感じていないと認められること。被害児童生徒本人及びその保護者に対し、心身の苦痛を感じていないかどうかを面談等により確認する。

学校は、いじめ解消に至っていない段階では、被害児童生徒を徹底的に守り通し、その安全・安心を確保する責任を有する。学校いじめ対策組織においては、いじめが解消に至るまで被害児童生徒の支援を継続するため、支援内容、情報共有、教職員の役割分担を含む対処プランを策定し、確実に実行する

上記のいじめが「解消している」状態とは、あくまで、一つの段階に過ぎず、「解消している」状態に至った場合でも、いじめが再発する可能性が十分にあり得ることを踏まえ、学校の教職員は、当該いじめの被害児童生徒及び加害児童生徒については、日常的に注意深く観察する必要がある

⑦ ネット上のいじめへの対応

ネット上の不適切な書き込み等については、被害の拡大を避けるため、ただちに削除する措置をとる。また、必要に応じ、警察や法務局等と適切な連携を図る。

⑧ いじめ重大事態への対応

「いじめ重大事態」の定義を児童生徒、保護者、地域住民等に周知するとともに、長崎市いじめ防止基本方針（参照：P22 重大事態への対処）に則った対応を行う。

(3) 「いじめ対策委員会」の設置（組織の名称は学校の判断による。）

学校は、当該学校におけるいじめの防止等に関する措置を実効的に行うため、複数の教職員、心理・福祉等の専門的知識を有する者その他の関係者により構成される「組織」を置くものとする。（第22条）

いじめに対しては、学校が組織的に対応することが必要であり、また、必要に応じて、心理や福祉の専門家、その他学校評議員や民生委員などの関係者が参加しながら対応する。

加えて、事案の発生に対しての臨時的な会議の開催にとどまらず、いじ

め事案への対応の確認や検証、いじめの未然防止等、日常的に積極的な活動を行うこと。

## 【役 割】

- 学校いじめ防止基本方針に基づく取組の実施や具体的な年間計画の作成・実行・検証・修正の中核としての役割
  - ・各学校の学校いじめ防止基本方針の策定や見直し、各学校で定めたいじめ防止の取組が計画どおりに進んでいるかのチェックや、いじめの対処がうまくいかなかったケースの検証、必要に応じた計画の見直しなど、各学校のいじめの防止等の取組についてPDCAサイクルで検証する。
  - ・「いじめ対策委員会」を実際に機能させるに当たっては、適切に外部専門家の助言を得つつも機動的に運用できるよう、構成員全体の会議と日常的な情報共有や報告のための関係者の会議を実施する。
  - ・「いじめ対策委員会」を構成する「当該学校の複数の教職員」については、学校の管理職や主幹教諭、生徒指導担当教員、学年主任、養護教諭、学級担任や部活動指導に関わる教職員などから、組織的対応の中核として機能するような体制を、学校の実情に応じて決定する。これに加え、個々のいじめの防止・早期発見・対処に当たって関係の深い教職員を追加するなど、柔軟な組織とすることが有効である。
- いじめの相談・通報の窓口としての役割
  - ・児童生徒や保護者、地域住民等が、いじめの相談や通報をできるよう、その窓口や手順、方法等を明確にしておく必要がある。
- いじめの疑いに関する情報や児童生徒の問題行動などに係る情報の収集と記録、共有を行う役割
  - ・「いじめ対策委員会」が、情報の収集と記録、共有を行う役割を担うため、教職員は、ささいな兆候や懸念、児童生徒からの訴えを、抱え込まずに全て当該組織に報告・相談する。いじめの該当性については、「いじめ対策委員会」を開催して判断する。集められた情報は、個々の児

児童生徒ごとに記録し、複数の教職員が個別に認知した情報の集約と共有化を図ることが必要である。

- いじめ問題に組織的に対応するための中核としての役割
  - ・ いじめの疑いに係る情報があった時には緊急会議を開いて、いじめの情報の迅速な共有、関係のある児童生徒への事実関係の聴取、指導や支援の体制・対応方針の決定と保護者との連携を図るなど、組織的な対応を図ることが必要である。

### 3 重大事態への対処

#### (1) 学校又は長崎市教育委員会による調査

##### ア 重大事態の発生と調査

##### ① 調査を要する重大事態の例

- 生命、心身又は財産に重大な被害が生じ、又は生じるおそれや生じた疑いがあると認める場合
  - ・ 自殺の企図
  - ・ 身体の重大な傷害
  - ・ 金品等の重大な被害
  - ・ 精神性の疾患の発症
  - ・ いじめを要因とした転校
- 相当の期間学校を欠席することを余儀なくされ、又はそのおそれや疑いがあると認める場合
  - ・ 不登校の定義を踏まえ、年間 30 日を目安とするが、児童生徒が一定期間、連続して欠席しているような場合
- その他の場合
  - ・ 児童生徒や保護者からいじめられて重大事態に至ったという申立てがあった場合

##### ② 重大事態の報告

- 重大事態を認知した場合、直ちに発生の報告を行う。
  - ・ 学校→教育委員会→市長

##### ③ 調査の主体

- 教育委員会は、学校からの報告を受けた際、その事案の調査を行う主

体や、どのような調査組織とするか判断する。

- 学校が主体となって調査を行う場合、教育委員会は、必要な指導、人的措置等の適切な支援を行う。
- 教育委員会が主体となって行う場合は、次のとおりである。
  - ・学校主体の調査では、重大事態への対応及び同種の事態の発生の防止に必ずしも十分な結果を得られない場合
  - ・学校の教育活動に支障が生じるおそれがある場合

④ 調査を行う組織

- 学校の「いじめ対策委員会」又は教育委員会の「いじめ問題調査チーム」において調査を行う。ただし、構成員の中に、調査対象となるいじめ事案の関係者と直接の人間関係又は特別の利害関係を有する者がいる場合は、その者を除き、公平性・中立性を確保する。
- 調査を行う組織の構成員については、事前に対象児童生徒・保護者の了承を得ること。

⑤ 事実関係を明確にするための調査の実施

- 対象児童生徒・保護者が重大事態調査を望まない場合
  - ・学校の設置者及び学校として、自らの対応を振り返り、検証する。
  - ・望まないことを理由として、重大事態として取り扱わないことはあってはならない。対象児童生徒の支援、関係児童生徒の指導及び支援を確実に行う。
- 弁護士相談の活用
  - ・教育委員会を主体とした調査、学校を主体とした調査のいずれの調査においても法的な見解が必要な場合等必要に応じて、法律相談を行う。
- 市に所属する専門的資格等を有する職員への相談
  - ・場合によっては、調査会議等への参加を依頼する。
- 重大事態に至る要因となったいじめ行為が、
  - ・いつ（いつ頃から）
  - ・誰から
  - ・どのような態様であったか
  - ・いじめを生んだ背景や事情
  - ・児童生徒の人間関係にどのような問題があったか

- ・学校・教職員がどのように対応したか
- などの事実関係を可能な限り時系列的に明確にする。この際、因果関係の特定を急ぐべきではなく、客観的な事実関係を速やかに調査する。
- いじめられた児童生徒からの聴き取りが可能な場合
    - ・いじめられた児童生徒から十分に聴き取る。
    - ・在籍児童生徒や教職員に対する質問紙調査や聴き取り調査を行う。この際、個別の事案が広く明らかになり、被害児童生徒や情報提供者に被害が及ばないように留意する。
    - ・いじめた児童生徒に対しては、調査による事実関係の確認をするとともに、指導を行い、いじめ行為を止める。
    - ・いじめられた児童生徒に対しては、事情や心情を聴取し、状況にあわせた継続的なケアを行い、落ち着いた学校生活復帰の支援や学習支援等を行う。
    - ・これらの調査を行うに当たっては、事案の重大性を踏まえて、教育委員会がより積極的に指導・支援したり、関係機関ともより適切に連携したりして、対応に当たる。
  - いじめられた児童生徒からの聴き取りが不可能な場合
    - (いじめられた児童生徒が入院又は死亡した場合)
    - ・いじめられた児童生徒の保護者の要望・意見を十分に聴取し、迅速に当該保護者と今後の調査について協議し、調査に着手する。
    - ・調査方法としては、在籍児童生徒や教職員に対する質問紙調査や聴き取り調査等が考えられる。
- ⑥ いじめられた児童生徒が死亡した時の対応
- その後の自殺防止に資する観点から、自殺の背景調査を実施する。その際、亡くなった児童生徒の尊厳を保持しつつ、その死に至った経過を検証し再発防止策を講ずることを目指し、遺族の気持ちに十分配慮しながら行う。
- ・遺族の要望・意見を十分に聴取する。
  - ・在校生及びその保護者に対しても、できる限りの配慮と説明を行う。
  - ・遺族に対して主体的に、在校生への詳しい調査の実施を提案する。そ

の際、調査の目的・目標、調査を行う組織の構成、おおむねの期間、方法、入手資料の取扱い、遺族への説明の在り方、調査結果の公表に関する方針について、できる限り、遺族と合意しておく。

- ・資料や情報は、できる限り、偏りのないよう、多く収集し、それらの信頼性の吟味を含めて、専門的知識及び経験を有する者の援助のもと、客観的、総合的に分析評価を行う。
- ・学校が調査を行う場合において、教育委員会は、情報の提供について必要な指導及び支援を行う。
- ・情報発信、報道対応については、プライバシーへの配慮の上、正確で一貫した情報提供を行う。なお、亡くなった児童生徒の尊厳の保持や、子どもの自殺は連鎖の可能性があることなどを踏まえ、WHO（世界保健機関）による自殺報道への提言を参考にする。

#### イ 調査結果の報告及び提供

- 調査結果は、速やかに報告を行う。調査結果の報告先は、次のとおりとする。
  - ・（学校を主体とした調査の場合）学校→教育委員会→市長
  - ・（教育委員会を主体とした調査の場合）教育委員会→市長
- いじめを受けた児童生徒及び保護者、並びにいじめを行った児童生徒及び保護者に対する情報を適切に提供する。
  - ・学校又は教育委員会は、いじめを受けた児童生徒やその保護者に対して事実関係等その他の必要な情報を提供する責任を有することを踏まえ、調査により明らかになった事実関係について、いじめを受けた児童生徒やその保護者に対して説明する。

#### 【調査結果を報告する際の留意事項】

- ・他の児童生徒のプライバシー保護に配慮するなど、関係者の個人情報に十分配慮する。ただし、いたずらに個人情報保護を理由に説明を怠るようなことがあってはならない。
- ・質問紙調査に先立ち、調査結果については、いじめられた児童生徒又

はその保護者に提供する場合があることをあらかじめ念頭に置き、調査対象となる在校生やその保護者に説明する等の措置が必要である。  
・学校が調査を行う場合においては、教育委員会は、情報の提供の内容・方法・時期などについて必要な指導及び支援を行う。

(2) 調査結果の報告を受けた市長による再調査及び措置

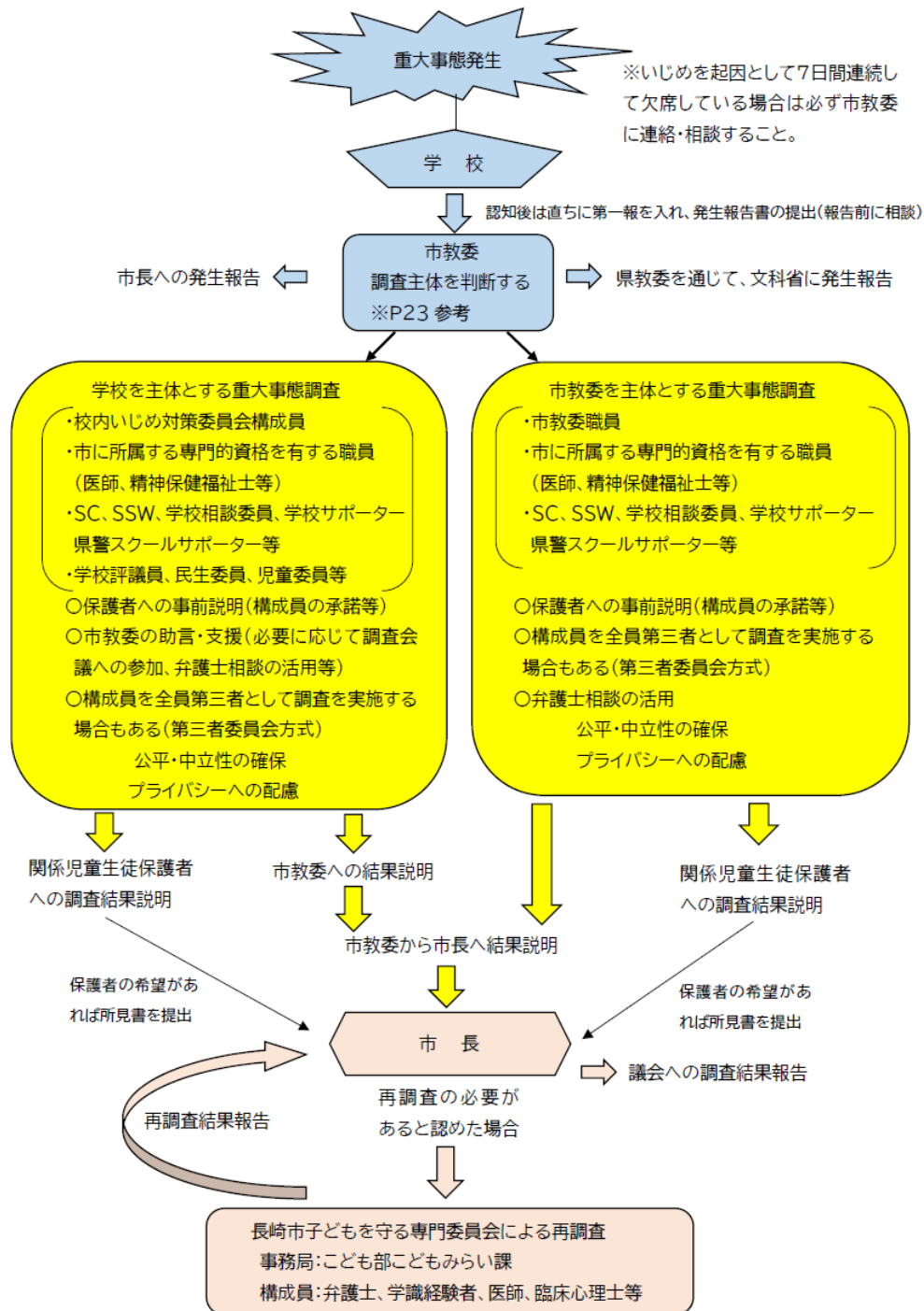
ア 再調査

- 重大事態の報告を受けた市長は、当該報告に係る重大事態への対処又は当該重大事態と同種の事態の発生の防止のため必要があると認めるときは、報告結果について再調査を行うことができる。
- この再調査は、長崎市子どもを守る条例に規定する長崎市子どもを守る専門委員会が行う。
- いじめを受けた児童生徒及びその保護者に対して、適時・適切な方法で、調査の進捗状況等及び調査結果を説明する。

イ 再調査の結果を踏まえた措置等

- 市立学校について再調査を行ったとき、市長はその結果を議会に報告する。(第30条第3項)
- 市長及び教育委員会は、再調査の結果を踏まえ、当該調査に係る重大事態への対処又は当該重大事態と同種の事態の発生防止のために必要な措置を講ずる。(第30条第5項、第31条第3項)

(3) 重大事態発生時の流れ



(4) 調査結果報告書の公表について

公表するか否かについては、学校の設置者及び学校として、当該事案の内容や重大性、対象児童生徒・保護者の意向、公表した場合の児童生徒への影響等を総合的に勘案して、適切に判断する。

いじめ防止対策推進法に定める組織の長崎市における位置づけ

◎…必置

	推進法に定める組織	長崎市で対応する組織	備考
地方公共団体	いじめ問題対策連絡協議会 (第14条①)	子どもを守る連絡協議会	長崎市子どもを守る条例の中に位置づける。
	教育委員会の附属機関 (第14条③)	/	いじめ問題調査チーム (学校教育課長を筆頭に、生徒指導担当4名、スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカー等で組織する)が兼ねる。
学校	いじめ防止等の対策のための組織(◎) (第22条)	いじめ対策委員会	スクールカウンセラー、学校相談員またはスクールソーシャルワーカーが入るように配慮する。
重大事態発生時	学校又は学校の設置者の置く調査組織(◎) (第28条①)	いじめ問題調査チームまたは、学校のいじめ対策委員会	事案発生時に、学校又は教育委員会が置く調査組織のどちらが調査するのか、市教委が決定する。
	地方公共団体の長が置く附属機関 (第30条②)	子どもを守る専門委員会	長崎市子どもを守る条例の中に位置づける。

### **第3 その他いじめの防止等のための対策に関する重要事項**

市は、当該基本方針の策定から3年の経過を目処として、法の施行状況や国の基本方針の変更等を勘案して、基本方針の見直しを検討し、必要があると認められるときは、その結果に基づいて必要な措置を講じる。

加えて、市は、学校基本方針について、それぞれの策定状況を確認し、公表する。